

国際会議参加報告(ICEM2010)

熊谷守^{*1}

10月3日(日)から7日(木)の5日間、つくば市のエポカルつくばを本会場として、標記の国際会議(The 13th International Conference on Environmental Remediation and Radioactive Waste Management)が開催された(筆者は3日~6日の4日間参加。7日は東海村へのテクニカルツアー)。本国際会議がわが国で開催されるのは3回目であり、約30ヶ国から約300名の参加があり、4件の基調講演、約150件の口頭発表、約50件のポスター発表と3件のパネルディスカッションが行われた。口頭発表は6会場に分かれて行われ、筆者はSession L(L/ILW)およびSession H(HLW)を中心に聴講を行った。

以下に本国際会議の概要について報告する。

Welcome Reception

10月3日の夕方より、本会場の101, 102会議室において開催された。会場入口付近で、Session L(L/ILW)のTrack Chairである日揮(株)中居邦浩氏と出会い、6日PMのSession L7のCo-chairsの一人が未定であるため、是非引き受けて欲しい旨の相談があった。筆者は国内の学会ですら座長の経験はなく、少し逡巡したが、良い機会であると考え引き受けることにした。Receptionでは、中居氏の紹介でもう一人の共同座長であるカナダ人のSheila M. Brooks氏と挨拶し、同氏も座長の経験はないこと、Session L7における4件の口頭発表のうち、カナダからの1件はキャンセルになったこと等について話した。Receptionの途中、出席者の外国人1名が体調不良を訴え、病院に搬送されるといったハプニングがあったものの、Reception自体は終始和やかな雰囲気であり、大いに盛り上がっていたように思う。

Opening Session

4日の午前中、メインホールにおいて開催された。はじめに歓迎の挨拶があり、4件の基調講演が行われた。歓迎の挨拶において示されたICEM2010のメッセージは、“A clean environment sustained by nuclear energy”であった。

基調講演では、鈴木達治郎原子力委員長代理より、日本の原子力発電所の稼働率向上、国民の理解のための情報公開、海外からのニーズに応えるための国際貢献の重要性について強いメッセージが出された。また、韓国KRMCのHo Taek Yoon氏からは、処分場選定に関する過去30年間

の韓国の経験について講演があり、処分場を受け入れた住民の90%が賛成を表明したとの説明があった。会場からは、「米国では有り得ない」といった驚きの声が上がっていた。

Technical Session

4日の午後から6日の午後まで、大小6つの会議室においてL, H, D(解体・除染), R(環境修復), M(環境管理), G(国際協力・多国間プログラム)の各Sessionが行われた。筆者はSession L1(廃棄物管理), D2(解体・除染), L2(固型化・廃棄体製作(1)), H7(性能評価モデル・パラメータ)を聴講した。印象に残った講演は以下のとおり。

- ・ Session L2: 中央アジア(モンゴル, カザフスタン等)のウラン鉱山における放射性廃棄物の規制に対するノルウェーの支援に関する講演。人の健康や環境に対する影響評価が全く行われておらず、周辺住民が危険性を全く認識していない国も存在すること。
- ・ Session H7: 土壌から葉菜へのC移行係数に関し、C-13を用いて行った実験結果に関する講演。実験結果によると、既往の文献で用いられているTF=25は過剰評価であるとのこと。

Panel Discussion

Session H3, H5, D4では、それぞれ「放射性廃棄物分野における人材育成」「放射性廃棄物処分における知識マネジメント」「過去の解体・除染活動から得られた教訓」についてパネルディスカッションが行われた。筆者はSession H3の一部とH5を聴講した。パネリストの講演内容や討論において印象に残った点は以下のとおり。

- ・ Session H3:
 - 人材育成には、規制機関、事業者、研究機関等、色々な経験を積むことが重要。
 - 問題となっている事項について、「誰が精通しているか？」を把握することが必要であり、ネットワークの構築が重要。
- ・ Session H5:
 - 「Information」と「Knowledge」とは別物。
 - 次世代への「Tacit Knowledge(暗黙知。経験や勘に基づく、明文化されにくい知識)」の継承において、ビデオテープ等の活用がアイデアとして考えられる。
 - 意思決定のプロセスがどのようになされたかの管理することが重要。

Report on the 13th International Conference on Environmental Remediation and Radioactive Waste Management by Mamoru Kumagai (mamoru.kumagai@jnfl.co.jp)

*1 日本原燃株式会社 埋設事業部 開発設計部 安全評価グループ Safety Assessment Group, Development and Engineering Dept., Radioactive Waste Disposal Business Division, Japan Nuclear Fuel Limited 〒039-3212 青森県上北郡六ヶ所村大字尾駈字野附 504-22

- 知識マネジメントシステムは中立であるべきで、国が費用負担すべき。
- 知識マネジメントシステムはソフトウェアであり、いずれ陳腐化する。
- 現在の開発者や議論に参加している者が引退すれば、システムを理解し、運営できる者は誰もいなくなる。

Poster Session

4日の午後2回、5日の午前・午後それぞれ1回ずつコアタイムが設けられて行われた。ポスター会場はお世辞にも盛況とは言えず。コーヒープレイクの会場とポスター会場とが分かれていたことや、Session ごとにブレイクの時間が微妙にずれていたことが原因ではないかと考えられる。筆者もポスターを掲示したが、正直なところコアタイム中は手持ち無沙汰であり、口頭発表にすれば良かったかなと感じた。

Banquet

5日の夕方に、オークラ・フロンティア・ホテル・つくば別館にて開催。日本人参加者による手品、テノール独唱が余興で披露され、会場は大いに盛り上がっていた。会場内に設けられた屋台風の寿司・そばコーナーは外国人出席者にも人気を博していた様子であった。



Banquet 会場にて、東北大・三村均教授（左から2番目）らと記念撮影。右が筆者。

Session L7

最終日の6日午後に本Sessionが開かれるということで、当日の朝8時より、Sessionの講演者とCo-chairsが集まり、段取りの調整を行った。講演は3件であり、Session開始の挨拶と最初の1件目の講演者紹介は前出のSheila氏が、2件目および3件目の紹介は筆者が担当することとなった。朝会では、講演者の経歴内容や氏名・組織名の発音についても確認を行った。台湾・精華大学から参加した学生氏名の英語表記は「Chia-Chin Li」であったが、発音となると

「ジャー・ジー・リー」になるということを知り、本番のSessionで講演者に気分良く発表してもらうためにも、国際会議ではこういった事前調整が非常に重要なのだと感じた次第である。

いよいよ本番である。最終日の午後ということもあり、聴講者の数は20~30名と少なめである。自分がCo-chairとして行った仕事は、日本人聴講者数名への講演内容評価フォームの配布・回収、自己紹介、質問者へのマイクの手渡し、2,3件目の講演者の紹介と講演に対するお礼の言葉、講演に対する質問、評価フォームによる講演内容の評価、といったことであった。講演の件数が少ないこともあり、本Sessionはあっという間に終了した。最後にSheila氏より、他の会場ではまだSessionが行われており、聴講者に対して配慮をお願いする旨の挨拶があり、本Sessionは閉会した。

何はともあれ、良い経験であった。



Session L7の様子。左がCo-chairのSheila M. Brooks氏。右が筆者。